



当社は、HS財団の動物実験第三者認証施設です

第 63号

2012年(平成24年)12月1日(業務企画部発行)

株式会社日本バイオリサーチセンター

Nihon Bioresearch Inc.

〒501-6251 岐阜県羽島市福寿町間島6丁目104番地

TEL 058(392)2431 FAX 058(392)2432

URL: http://www.nbr.co.jp/

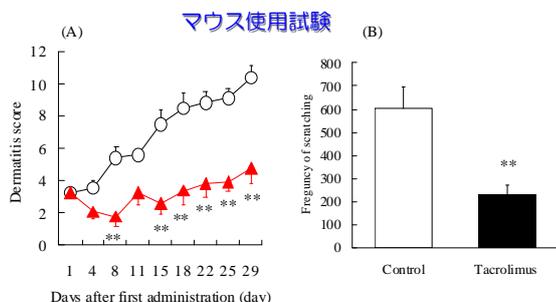
## 炎症・アレルギーに関する試験モデル

当社では、数々の「炎症・アレルギー」をキーワードとした薬効薬理試験モデルを有しています。本号では、マウス、ラット、モルモットの小動物からミニブタまでの大動物に至る試験モデルを紹介します。



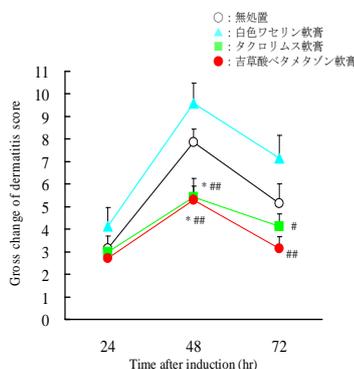
### 1. 皮膚炎モデル

NCマウスを用いたPiClあるいはダニ抗原連続塗布によるアトピー性皮膚炎モデルを用いて皮膚炎症状、血中IgE値、皮膚の病理組織について評価しています。また最近、ミニブタを用いたアレルギー性皮膚炎モデルも確立しました。



Effects of Tacrolimus ointment on dermatitis score in skin-lesioned NC mice after PiCl induction (A). Values represent the means and S.E. (12~14 weeks old, n=8). ○: control. ▲: Tacrolimus ointment. Scratching behavior was observed 360 min after the 6th PiCl induction (B). Significantly different from control group at \*\*p<0.01.

(第19回生物試料分析科学大会にて報告/2010.2.21)



Change in gross lesions of DNFB allergic non-treated sites, white petrolatum ointment sites, tacrolimus ointment sites, betamethasone valerate ointment sites. Results are expressed as the means±S.E.M. (N=7).

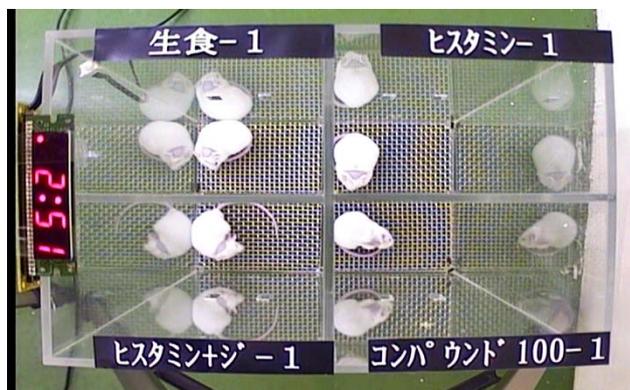
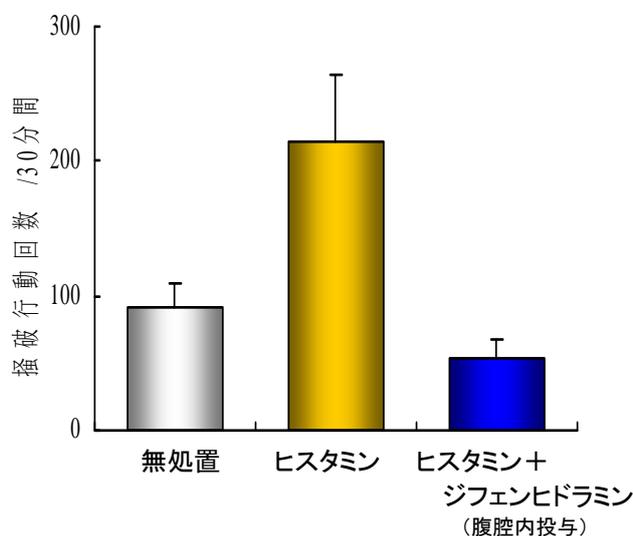
\*:p<0.01 compared with Non-treated. #:p<0.05, ##:p<0.01 compared with White petrolatum ointment.

(第119回日本薬理学会近畿部会にて報告/2011.7.8)



### 2. 掻痒モデル

掻痒抹消性掻痒モデルとして、ヒスタミン、サブスタンスP、コンパウンド48/80を誘発物質とした掻破行動誘導モデルを確立しています。

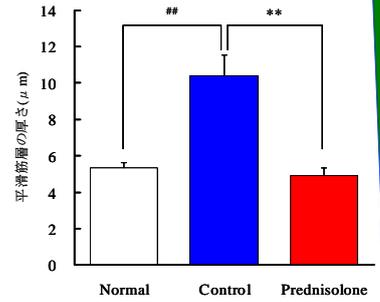
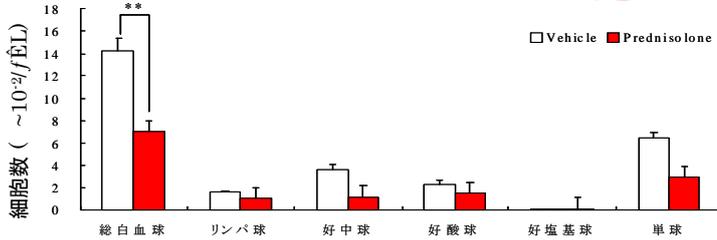
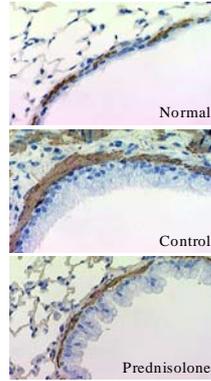


掻破行動観察写真



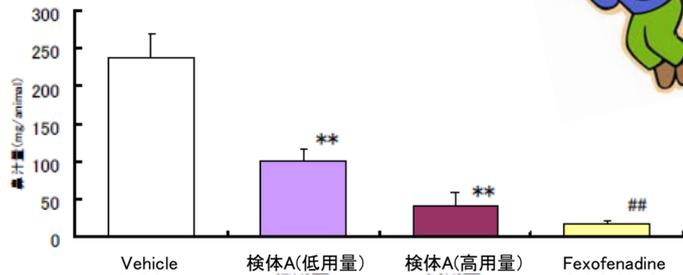
### 3. 喘息モデル

マウスを用いた喘息モデルを、ステロイド薬をポジコンとして確立し、BALF(肺洗浄液)中の炎症細胞の動因や病理組織について評価します。



### 4. 鼻汁分泌モデル

モルモットでのアレルギー性鼻汁分泌モデルを作製し、アレルギー反応による鼻炎を鼻汁量を測定することにより評価します。



### 5. 結膜炎モデル

ラットでの結膜炎モデルを用いて、点眼液の効果を評価します。

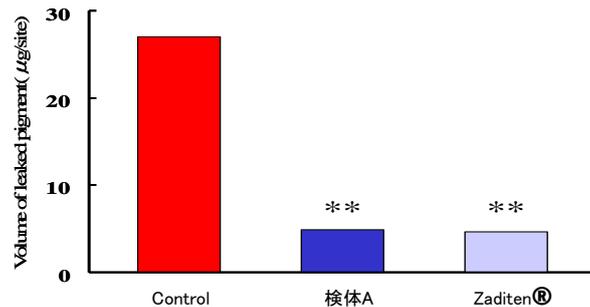


Fig. 1. Equivalence study of A and Zaditen® ophthalmic solution with experimental allergic conjunctivitis model in rats

その他、カラゲニン浮腫モデル、アジュバント関節炎モデルなどの急性炎症モデル、皮膚切創および欠損傷などの創傷治療評価モデルなど、目的に応じた試験モデルを揃えています。是非一度お問い合わせください。

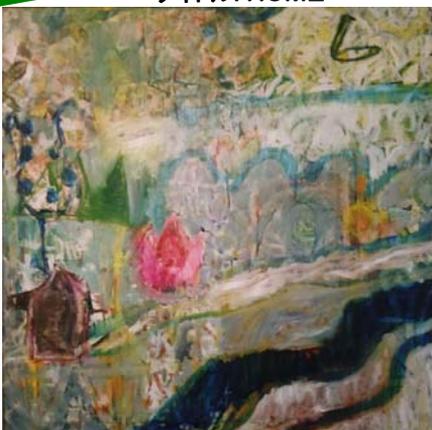
問合先 TEL 058(392)2431 (業務企画部直通)



佐部利 典彦のアートギャラリー(63)

岐阜県出身(1969~)

タイトル: HOME



作者の言葉

自分が今、生きている場所、空間、生きている自分が感じる生をテーマに描いています。どうやら「生」が気になっているようです。 サイズ:S100号 技法:キャンパス

『心の絆 - その63 - 』

最近、昭和の高度成長期に一世を風靡されたコメディアン、孤独死の報道を知り、改めて生きること、老いることの難しさを考えさせられています。近年、残念ながら孤独死は珍しいことではありませんが、青年期、実年期に華やかな活躍をされた方ほど、「あの方が孤独死と！」と強烈な印象を受けるものです。私たちの仕事は昔なら助からなかった病気を治癒し、延命させる薬の開発にお手伝いをしてきました。現に1947年に男女平均で50歳だった平均寿命は、今は83歳まで延びています。今後、再生医療やiPS細胞などの学問の進歩によって現在、難病と言われる疾患が治癒し、さらに延びていくことでしょう。以前の專欄(vivo37号)で、人は歳を重ねるほど幸せにならないといけないことを記していますが、孤独死はその有り様の難しさを痛感させられます。それと共に、科学の力は「どれだけ生かせるか」と命の長さを求めてきたよう思いますが、それは目的ではないと思います。目的は科学の進歩で生かされた人間が「どう生きたか」ではないでしょうか。